

「 山崎宗鑑と一夜庵 」

滑稽俳句論壇二十八で「犬筑波集」を編集した山崎宗鑑に触れていましたが、宗鑑は守武と共に俳諧の鼻祖である一方、滑稽俳句の元祖と思うのであります。

宗鑑は、享禄(一五二八年)香川県観音寺市興昌寺に一夜庵という草庵を建て、天文二十二年(一五五三年)十月、八十九歳で没した。

一夜庵の名の由来は、「上は立ち中は日ぐらし下は夜まで一夜どまりは下々の下の客」と題し、人を泊めること一夜以上を許さず、このことから一夜庵と名付けた。

一夜庵に住んでからの創作活動は活発で、多くの俳人達が訪れた。

昭和三十二年(一九五七年)、宗鑑翁、四百年忌を記念して一夜庵の登口に句碑が建立された。句碑には彼の代表作とされる、

「 かし夜ぎの袖や霜にはし姫御 」

と刻まれている。

この句意は、観音寺市教育委員会の解説に依れば、「冬の夜ふけ貸し夜着の袖に降りた霜に白くそめて、橋のたもとに寝ている乞食をみて、あれは橋姫ではないかと、興がって詠んだものであろうと言われている。橋姫とは、橋を守る女神で、特に宇治橋の守り神のことである。源氏物語宇治十帖に「橋姫」の一巻がある。また、一説には橋姫は下級の遊女のことで、その遊女が貸し夜着の袖を霜で白くそめている姿をよんだものともいわれている

その外伝、宗鑑作とされる句を列記すると、

元朝の見る物にせん富士の山

筆ひぢてむすびし文字の吉書哉

満丸に出てもながき春日かな
にがにがしいつまであらしふきのたう
花の香をぬすみてはしる嵐かな
手をついて歌申しあぐる蛙かな
うづきゝてねぶとに鳴や郭^{ほととぎす}公
月に柄をさしたらばよき團^{うぢわ}かな
七夕の夢のうきはしは烏鶺かな
風寒し破れ障子の神無月

この草庵へは多くの俳人が訪ねて句を詠んだ。

いられぬや雪の下客の一夜庵	鬼貫
ありがたき姿おがまん燕子花	芭蕉
花にあかでたとへばいつまで一夜庵	宗因
きりぎりすさむしろゆるせ一夜庵	竹阿
宗鑑の墓に花なき涼しさよ	虚子
此庵に短過ぎたる我日かな	小波
一夜庵筒抜け風に蝉涼し	野風呂
松の奥には障子の白きに松	井泉水
浜から降りても松の影ふむ砂の白さに	碧梧桐